

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4270600325		
法人名	社会福祉法人 五島会		
事業所名	グループホーム 福寿園		
所在地	長崎県五島市吉久木町907-1		
自己評価作成日	令和5年6月1日	評価結果市町村受理日	令和5年10月13日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kaigokensaku.jp/42/
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 福祉総合評価機構
所在地	長崎県長崎市宝町5番5号HACビル内
訪問調査日	令和 5年 7月 19日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

グループホーム福寿園は、隣接する介護老人保健施設があるので、入居者に緊急事態が発生しても看護師などの応援体制があるので、介護職員も入居者も安心して生活できています。そしてこのGHの建物は、認知症によって徘徊しても安心した設計となっており、園内はガラス窓が多く、日射しが明るく常に自然や四季を感じることができる環境にあります。日頃より本人の生活ペースを尊重し、安心して穏やかな生活を送れるよう支援しています。隣接する老健での行事に参加したり、小学生との交流等で生活に楽しさと変化を与えることができています。そして、グループホームでの生活が困難になった場合は、老健での入所など最期まで安心して生活を送ることができるようになっていきます。また、法人は人を育てることを目標に掲げ、定期的な研修を重ね、必要な知識や技術を身につけケアに活かしています。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

ホームは母体法人の高齢者施設に隣接しており、施設はもとより理学療法士や医師との連携が可能な環境である。理学療法士は入居者一人ひとりの状況を把握しており、ホームでは助言を介護計画に反映している。職員同士のチームワークが良く、新人の職員が仕事に困らないような工夫や、職場内で気づいたことがあれば職員同士で話し合っている。職員の研修制度も充実しており、職員自身が議題を決めて行う身体拘束廃止委員会や、法人全体で行う研修についてもホームが研修を担当することがあり、職員が主体となって研修を行うことで、より深い学びに繋がっている。また、日々の食事では郷土豊かで彩りの良いものであり、家庭的な雰囲気である。理念として掲げている「家庭的な雰囲気の中でその人らしく尊厳のある生活を目指し、目配り・気配り・心配りで心に寄り添うケアを提供します」を具現化しているホームである。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印
56 職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない	63 職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57 利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64 通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○ 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58 利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65 運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○ 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59 利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66 職員は、生き活きと働いている (参考項目:11,12)	○ 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60 利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67 職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61 利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68 職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62 利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I.理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	「家庭的な雰囲気の中でその人らしく尊厳のある生活を目指し、目配り・気配り・心配りで心に寄り添うケアを提供します」を理念として毎日、朝の申し送りや唱和している。	介護目標に“統一したケアを行うことで、不安のない楽しい生活を築けるよう支援している”を掲げている。質の高いケアを行うため、隣接する介護老人保健施設から理学療法士が月に1度訪れ、各入居者のケアをアドバイスしている。ベテラン、新人とともに統一したケアを行うため取り組んでいる。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	コロナの為、制限はあったが老健で小学生との交流会に参加するなど交流が行えた。	コロナ禍での制限はあるものの、地域と交流するための行事を開催したり、隣接する介護老人保健施設が開催している行事に参加している。昨年は餅つきや栗拾い、芋掘り等の行事が見てとれる。その他にも、職員と入居者で地域のごみ拾いを行い、地域との交流を図っている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	ホームで行った認知症の研修を運営推進会議で伝えている。家族との会話の中でも伝える機会を持っている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	コロナの為、文書での伝達が多かったが開催時は意見を伺い取り入れている。	コロナ禍のため、6回中4回は書面会議、2回は参加者を絞って対面で開催している。対面で開催した際は、コロナ禍での行事や外出について報告している。現在、コロナが5類へ引き下げられたことを踏まえ、入居者の家族が順番に参加できるような仕組み作りを検討している。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者や日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	電話で、分からないことは質問し答えを頂いている。	コロナ禍では、市からのマスクやビニール手袋の提供を受けている。また、入居者・家族の行政サービスや制度の不明点についての質問には、市町村に確認し、随時回答している。主任者研修、認知症についての研修では、当法人が運する介護老人保健施設にてオンライン研修を受けている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	毎月職員が交代で身体拘束についての研修を行っている。何が身体拘束にあたるのか話し合っている。	3ヶ月に1回の運営推進会議での身体拘束適正化委員会とは別に、身体拘束廃止委員会を開いている。本委員会では、各職員が身体拘束についての気づきや勉強したことを議題に挙げ、職員がディスカッションしており、職員の連携によって、入居者主体の拘束のないケアに繋がっている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	2か月に1回、職員が交代で担当して研修を行っている。施設でのケアについても虐待にあたらぬか確認している。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	今までに成年後見制度を利用している入居者が居た。その時に学ぶ機会を持った。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約については、利用約款、重要事項説明書を必ず説明し、同意後に署名・押印を頂いている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	玄関に意見箱を設置している。直接会話した時や電話でも個別に意見を伺っている。	コロナ禍は家族の面会ができなかった時は、毎月一筆箋での便りと写真を送り、状況がわかるように工夫していた。ガラス越しの面会から、現在は県外以外であれば、10分程度居室での面会に移行している段階である。遠方の家族から面会の希望があり、状況を把握しつつ検討している。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	毎日の申し送りやスタッフ会議で職員の意見を聞いている。その意見を主任者会議で伝えることができる。	朝の申し送りや全職員が出席する月1回のスタッフ会議では、職員が提案や意見している。職員の声から、外部からの空室状況の問い合わせに統一した電話対応ができるようマニュアルを作成し、活用している。また、ヒヤリハットから利用者にとって危険箇所にはカバーを設置するなどの事例がある。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	勤続年数による表彰や有給休暇の取りやすさなど、職場環境・条件の整備に努めている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	法人内に外部講師を招いたり、オンラインで研修を受ける機会を確保している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	グループホーム協議会に入っていて、ケアマネの他施設との勉強会で交流をはかっている。		
II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	会話の中で本人の要望や心配事等話してもらえるように、本人からの言葉を大切にしている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	家族に何か知りたいこと、不安なことが無いか確認している。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	サービスを導入する前に聞き取りを行い、本人や家族の必要としている支援を見極め提供している。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	野菜の皮むき、調理、洗濯物たたみ、新聞折り等、本人の出来る事を行ってもらう事で意欲や生き甲斐を持てるように支援している。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	毎月入居者の様子を写真と手紙で伝えている。家族からも来園時や電話で話を聞いている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	家族や親戚から本人の好物が送られてきたり、直接持ってきてくれることもある。	ぬり絵や編み物、絵画、ラジオやテレビ観賞など、入居者一人ひとりの趣味等を把握し、支援している。コロナが少し下火になっているため、現在はカトリック信者である入居者のために、神父が訪れている。ホームは今後、以前のように友人や仕事仲間、近所の人などが訪れることを期待している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せず利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	職員が間に入って会話を取り持ったり、何人かで一緒に作品作りや日常の洗濯物たたみ等を行ったりして関わり合っている。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	退所後もこれまでの関係性を大切に、必要に応じて相談や支援に努めている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	入居時に思い出や暮らし方の希望、意向の把握に努めている。入居後も定期的に聞き取りをしている。	本人の生活歴として新しく知り得た情報は、職員間で共有できるよう記録している。起床、就寝時間は自由であり、リビングで夜の9時くらいまで寛ぐ入居者もいる。起床時に一日着る服を自分で選んだり、化粧する人もいる。意思疎通が難しい場合は、単語で伝えるなど工夫している。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	本人や家族から話を聞いて、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	介護日誌に記録し、心身状態の変化は特に職員全員で把握できるよう申し送りでも伝え合っている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	全職員で月に2回カンファレンス・モニタリングを行い意見を話し合っている。家族にも電話や面会時に意見を聞いている。	ケアプランは入居者が毎日を楽しめるようQOLの向上に着目しており、体を動かす目標を入れ、職員は日々目標の達成に努めている。運動目標については理学療法士からの助言をもとに作成し、本人に合ったケアプランとなっている。ただし、家族の意向の聞き取りや計画への意向の反映が確認できない。	家族に意向を尋ねているものの、ホームに一任することが多いため、普段の会話等、家族の意向を聞き出せるような工夫が求められる。
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	健康管理表、排泄チェック表、水分チェック表、ケアプランチェック表等記録を行っている。介護日誌にも日々の様子や支援した内容を記録している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	本人や家族の希望を大事にしてその時々で適切なサービスを受けられるように対応している。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	市の広報誌の情報を活用している。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	本人や家族の意向を優先してかかりつけ医を決定している。	入居者・家族の意向を優先し、職員が同行してかかりつけ医の受診を支援している。時には職員だけでなく家族も同行し、治療の方針などをかかりつけ医の説明を受けている。夜間の緊急時はかかりつけ医では対応が難しく、総合病院へ連絡するなどの手順を職員は理解している。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	週に1回看護師の訪問があり、気づきを報告・相談している。訪問とは別に電話でも相談する事がある。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院時はその日のうちに、遅くても翌日には介護サマリーを提出している。早期退院できるよう病院関係者との関係づくりを行っている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	本人・家族との話し合いを行い、事業所で行える事を十分に説明し方針を決めている。	隣接する介護老人保健施設と連携し、重篤な状況の入居者は老健の医師から診察を受けたり、医師の指示の下、環境が整っている老健へ移行している。7年前にホームでの看取りの事例があり、その際も老健の医者の下で行っている。ただし、現在の職員は看取りに関する経験がない人も多い。	看取りの経験がない職員のためにも、終末期及び看取りについての研修や職員間での認識の共有が望まれる。
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	急変や事故発生時等の緊急時の対応マニュアルを作成している。定期的な研修を行い、実践力を身に付けている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を日常的に防火管理及び消火、避難訓練等を実施することにより、全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている。 また、火災等を未然に防ぐための対策をしている。	年に2回総合訓練を行っている。その中で消火や避難の方法を身に付けている。隣接する老健施設にも参加してもらっている。	年に2回、夜間想定総合火災訓練及び土砂災害避難訓練を実施している。火災を防ぐために、毎日夜勤の職員がチェック表を使い、点検を行っている。隣接する介護老人保健施設とも、自然災害を含む災害対策に関する情報共有を行っている。	
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	スタッフ会議や研修の中で、言葉遣いや対応について話し合いを行っている。	法人内グループホーム年間教育計画には接遇や個人情報保護、スマホの使い方等の講義がある他、職員は入居者一人ひとりの尊厳を重視している。入居者は苗字にさん付けで声掛けし、本人が失敗した時はさりげなく対応している。言葉遣いや対応についてスタッフ間で注意し合っている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	食べたい物や行きたい所、欲しい物等、希望を聞いて対応している。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	1人ひとりのペースを大切にし、入浴日や起床時間も希望に沿って支援している。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	本人の希望に合わせて愛用品を使用してもらっている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	日常の野菜の皮むき等の他に、お好み焼き作り、お焼き作り、ケーキ作り等も企画して食事を楽しむことが出来るよう支援している。	毎日の献立は当日に入居者のリクエストも聞きながら決めている。郷土料理の五島うどんや時期を見ながら刺身も提供しており、会話のきっかけになっている。さつま芋を入居者も一緒に収穫したり、野菜の皮むきを手伝ってもらっている。当番の職員は、彩りよく食欲をそそるように工夫している。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事量や水分量のチェックを行っている。お粥や刻み食、ゼリー等状態に応じて対応している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後口腔ケアを行っている。定期的に歯科医にチェックしてもらっている入居者もいる。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	排泄チェック表をつけ、必要な人には声掛けや排泄介助を行っている。法送りや会議で支援内容の検討を行っている。	職員は、排泄の自立に向けてチェック表に記録しながら定期的に声掛けして誘導するとともに、パッドのサイズや種類など個別に検討している。ホームには布パンツで過ごす人もおり、排泄が自立している人は、一人でトイレに行くことも多い。夜間帯のポータブルトイレは、使用の都度洗浄している。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	水分量を増やす為、好みの物を提供したり工夫している。腹部マッサージを行っている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	希望に合わせて入浴日を変更、入浴の順番も入居者の希望を優先している。	4人、5人に分けて週3回の入浴を支援しており、入浴拒否には、無理強いせず翌日に変更している。冬場は入浴剤を入れる他、夏場はシャワーを好む人が多く、職員は本人の希望に沿って支援している。好みのシャンプー類を使用する入居者もいる。入浴の時間は、入浴者と職員が1対1になる機会でもあり、ゆっくりと昔話を聞いている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	昼寝をしたり、居室でテレビやラジオを聴いたり編み物をしたり、本人の希望に沿って支援している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	薬の変更は介護記録・申し送りノートに記入し全員が確認している。カンファレンスやモニタリングでも話をしている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	野菜の皮むきや魚を捌く等、1人ひとりの力を活かした役割を支援している。本人の好む飲食物の提供、テレビ番組(DVD)の視聴等それぞれに合わせている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	天気が良い日には、希望を聞いて外を散歩している。ドライブに行くこともある。	気候のよい時には散歩したり、屋外で食事することもある。ドライブは、月3回は、車椅子を乗せることができる法人の車輛を借りて出掛けている。季節の桜、菜の花、あじさい等の見物は好評である。また、芋掘りも楽しみの行事となっており、職員は入居者が戸外に出る機会を多く作るよう努めている。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	入居者の希望や力に応じて、お金を所持している入居者もいる。預り金から欲しい物を職員に頼んで購入している入居者もいる。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	家族への電話を支援している。届いた手紙を渡し、希望があれば読んで伝えることもある。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	窓が多く明るい雰囲気、広さも十分にあり、中庭に花も咲いていて季節を感じることが出来る。	ホーム内は清掃が行き届いており、リビングの窓からは水田が広がっている風景が見える。共有空間はテレビの音量も小さく、職員の声も穏やかで心地よい環境となっている。リビングには季節の切り絵があり、入居者との会話のきっかけとなっている。また、中庭には季節の花が咲き、心和む空間である。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	テレビを囲むようにソファを置いている。窓際にもソファがあり、静かに過ごすことも出来る。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	本人や家族が自由に居室を飾ることが出来る。写真やテレビ、ラジオ、本、宗教の品物等本人が居心地よく過ごせるよう工夫している。	各居室は、掃き出し窓であるため換気もよく、採光も良好である。入居者それぞれに、テレビや衣服、帽子や家族の写真があり、居心地のよい居室となっている。パッド類は収納し、ポータブルトイレには布を掛けて、居室としての佇まいを大切に支援している。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	施設全体に手すりがあり安全に歩いて過ごせるよう工夫されている。居室に名札があり、自分の部屋が分かるようになっている。		